

共感性と表情認知の関係

The relationship between empathy and the cognition of facial expressions

1K06A208

指導教員 主査 山崎勝男先生

原 朋希

副査 鈴木晶夫先生

【目的】

近年、我が国において少子化と核家族化が進むにつれて、対人世界の中で発達する共感性と表情認知能力といった非言語コミュニケーション能力が低下している。その結果、急激に人間関係が希薄化してしまっている。そこで本研究では、独自に表情刺激を作成し、共感性の類型についてその信頼性と妥当性が証明されている共感経験尺度改訂版（empathic experience scale revised : EESR）を利用して、共感性の類型と表情認知の関係について検討することを目的とする。具体的には、「共有経験を多くしている両向型と共有型は嫌悪と怒りに対して強く評価し、共有不全経験を多くしている不全型と両貧型は恐怖と喜びを強く評価する」という仮説を検討する。さらに、性別、兄弟の人数とその中での位置、引越しの回数といった被験者個人の基礎情報も影響すると考え、それらの分析も行う。

【方法】

<被験者> 健常な大学生 138 名(男子 81 名, 女子 57 名; 平均年齢 20.62 ± 1.25 歳)

<実験課題> EESR への回答および表情の判断とその強度の評価

【結果】

<仮説の検討> 怒りのみに類型間に有意差がみられた。共有型と両貧型が強く評価しており、一番弱く評価した両向型に比べると特にその差が顕著であった。

<共感性, 表情認知と基礎情報の関連の検討> EESR の得点と類型, 表情認知の正確性と認知する強度について基礎情報との関係を検討した結果, すべてに共通して性差がみられた。このことから, 本研究の仮説である共感性の類型と表情を認知する強度の関係にも性差が影響していると考えられる。そこで男女別に仮説を再検討した結果, 男子においては共有型が他の 3 類型よりも驚き, 喜び, 悲しみを強く評価し, 両貧型が両向型と不全型よりも怒りを強く評価することが明らかとなった。しかし, 女子においては両貧型に比べると共有型が怒りを強く評価する傾向がみられたのみであった。

【考察】

仮説を検討するにつれて, 表情認知の特徴として日常生活の中でその表情に接する頻度が多い表情は認知されやすく, またその認知によってその後の人間関係に直接影響を与えない表情は強く認知されることが示唆された。さらに, 仮説を再検討した結果, 人間関係を築くにあたって性別によって重要視する点が異なり, 男子は共有経験・共有不全経験の有無を重視しているが, 女子はあまり重視していない可能性が示唆された。

【結論】

本研究結果とそこから示唆された事柄をもとに, 基本の 6 表情を 3 つの群に分類すると, 第 1 群は, 恐怖と嫌悪が含まれる, 共感性の類型と表情認知の強度に関係がみられなかった群で

ある。第 群は、驚き、喜び、悲しみが含まれる、男子に限っては共感性の種類と表情認知の強度に関係がみられた群である。第 群は、怒りが含まれる、第 群にも第 群にも含まれない表情の群である。今後はさらなる統計分析による解析と共に、男子・女子それぞれで人間関係を築く際に重要視する点について検討する必要がある。